

呉錦堂を語る会通信

NO.10 Aug. 2013

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2013.8.15

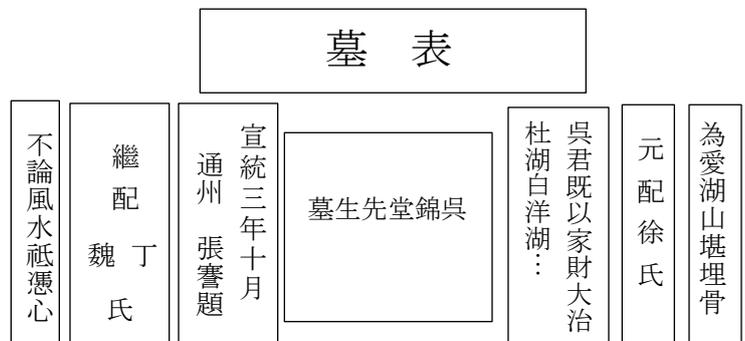


呉錦堂の故郷慈溪 その2（呉錦堂墓表）

この10号では呉錦堂墓の新旧二つの墓表と陳徳仁孫中山記念館副館長（当時）建立の「呉公作鑲澤郷碑」の碑文、それぞれの原文と日本語訳を取り上げました。現在の墓表原文と「呉公作鑲澤郷碑」碑文は、私（橋）が撮影した写真から書き起こしたもので、章炳麟の筆になる旧墓表の原文は童兆良著『溪上尋踪』（中国文史出版社、2005年発行）よりの転載です。童兆良氏は慈溪の文史学者で2006年に亡くなられています。ご冥福をお祈りいたします。日本語訳、並びに訳文中の注記は全て橋です。訳など、不十分な箇所も多いかと思ひます。ご指摘ください。（編集委員 橋雄三）



呉錦堂墓のレイアウト



吳作鑲先生、字錦堂、慈北東山頭人、生於公元一八五五年十一月十四日。少時隨父力耕、壯而東渡日本、終成豪商、名重中外。富有道、『不欲以多金為子孫計』、而以桑梓為重。耗銀數十萬元、始則疏浚二湖四浦、築橋設閘、解鄉民旱澇之憂、繼而興辦錦堂學校、招賢聘能、廣育英才、啓迪民智、適逢災年、出資賑民。辛勞跋涉、造福鄉里。終其一生、德澤昭然。先生於公元一九二六年一月十四日長逝神戶。旋遵遺願、歸葬中華、靈安白洋。茲以舊銘損毀、另撰新辭、雖未什一、亦足風世。

慈溪縣人民政府
一九八四年仲夏

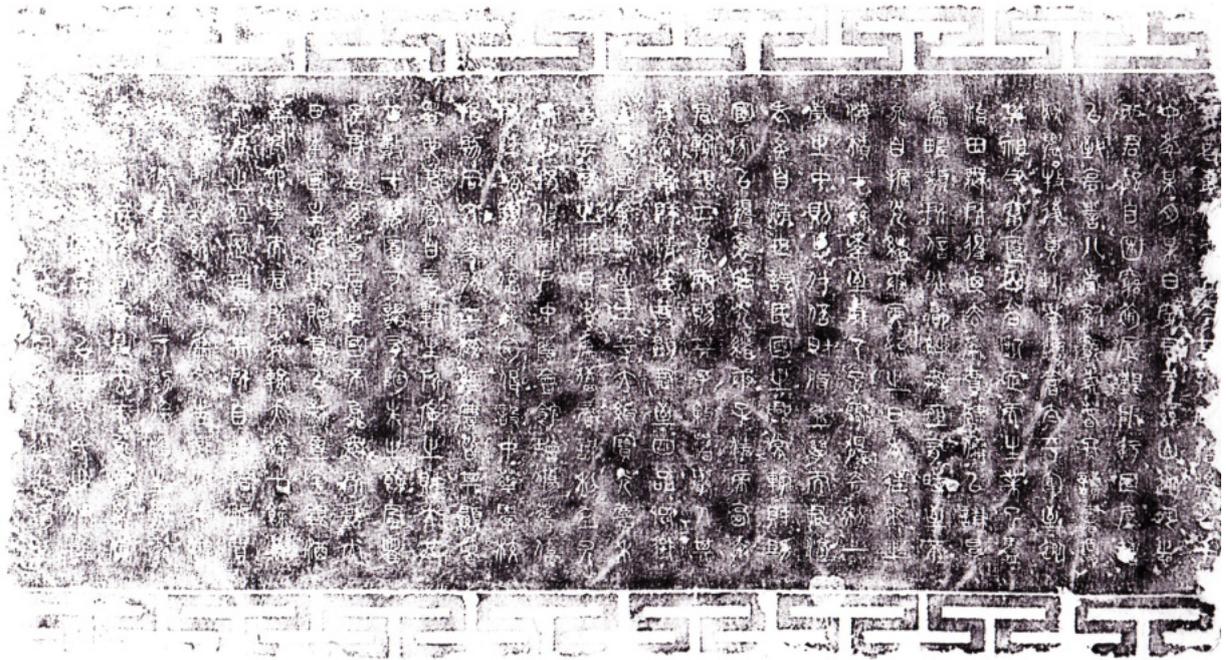
吳作鑲先生、字は錦堂、慈北東山頭の人、西曆一八五五年十一月十四日生まれ。少時、父に随い農耕に従事、壯年になって、日本に渡り、終に豪商と成る、その名、中外に重し。富裕にして道義に篤く、『多額の金を以て子孫への計と為すことを望まざ』、桑梓を以て重しと為す。銀数十萬元を費やし、まず、二湖四浦を浚渫し、橋を作り閘門を設け、郷民から旱害と水害の心配を除き、続いて、錦堂学校を設立、優秀な教師を招聘し、広く英才を教育し、民智を啓発、災害の年には、出資し民を救済。故郷を出て苦勞し、郷里に幸福をもたらした。その一生、徳沢は明らかである。

先生は西曆一九二六年一月十四日、神戸にて逝去。まもなく、遺言に従って中国に帰葬、靈は白洋湖の畔に眠る。今般、旧碑銘は毀損されたので、別に新辭を撰ぶ、十分の一にも及ばないが、また、世人の宿願に応えるものである。

慈溪県人民政府
一九八四年仲夏

章炳麟の篆書の書になる旧墓表

右の拓本写しは孫文記念館所蔵



。。。六年某月某日，寇君于兹山，从夙志也。君起自困穷，备历艰险，迂迴辗转，以致高赀。八岁就塾，每春冬读书，夏秋农牧，后竟辍学，适会太平军至，从其祖父窜匿山谷，乱定，而生业已尽。治田无所得，乃去为贾肆傭，以谦厚为畴类所信，然赢絀无恒，有时至不能自振。光绪庚寅，始之日本，往来上海，积十余年，至岁乙巳，骤得奇利，一岁之中，则息什倍，财货益孳，而君■老矣。自清世迄民国之兴，常输财助国家，以得褒叙。光绪庚子，清帝西奔，君输银二万两，赐其子叙藩举人。其后常输财清廷，奠显君至四品卿衔，■民国累勋至二等大绶宝光嘉禾章。云君之在日本，为侨商谋利益尤众，如捐修神戸中华会馆，增修华侨■枋、培筑华侨义塚，创设中华学校、捐助“同文、华强”二校经费，皆其显著者也。君尝自言：“毕生所作之财，太共百数十万元”，可谓有陶朱之余风者已。君以多资居异国，不能无所献，大日本国主仍世赠君以勋章、金银、酒器，凡六事，而君所委输亦达十余万焉。君之经历，详于其所自述，措辞质实，无所粉饰，又尝为文告乡人，毋游惰，毋缴幸，大■归于勤俭治生，然与君习者，咸谓君实具天才，能烛万货之■，其致富良有以也。吴氏出仲讎之裔，仲讎■秦伯同奔荆，后世谓之。。。

(墓表前后残缺。看不清的字，用■标出)

…6年某月某日、先生はこの地に埋葬された、早くからの願いである。先生は困窮から奮起し、つぶさに艱難を経験し、迂回転々、ついに大きな財をなした。八歳で入塾、毎年、春と冬は勉強し、夏と秋は農牧に従事した、のち竟に学業をやめた、丁度、(*1)太平軍がやってきて、お祖父さんに随って逃げ、山谷に隠れた、乱は鎮まったが、生業はすでに尽きた。田を耕しても収入が無く、そこで、商店の雇人になり、謙虚誠実で仲間の信用を得た、しかし、儲かるときもあれば損をする時もあり、時には立ち上がれなくなることもあった。光緒庚寅(1890年)、はじめて日本へ渡り、上海を往来、十余年を重ね、乙巳(1905)の年に至り、突然、巨利を得、一年の内に、利息は十倍、財貨は財貨を生んだ、しかして、先生はすでに年老いた。清末から中華民国の初めにかけて、常に財を献納し国家を助け、もって、褒賞を受けた。光緒庚子(1900年)、(*2)清帝西奔、先生は銀二万両を献納し、その子(*3)叙藩に挙人を賜った。その後、常に清廷に財貨を献納、先生は四品卿に叙され、また、中華民国の時代に功績を重ね、二等六綬宝光嘉禾章を受けた。先生は日本にあって、僑商のために多くの利益を図った、例えば、私財を出して神戸中華会館を建築し、華僑牌坊を増築し、華僑義荘を建設し、中華学校を創設し、同文、華強二校の経費を助成した、皆それらは顕著である。先生はかつて、“一生の間に合計百数十万元の財をつくった”と言っていたが、まさに(*4)陶朱の遺風があるというべきである。先生は、多くの財産をもって異国に居住しており、献上しないわけにはいかず、大日本国主はしきりに先生に勲章、金銀、酒器など、およそ六つの物を贈り、先生の献納した財貨は十余万に達した。

(以下、3頁下段に続く)

陳徳仁孫中山記念館副館長(当時) 建立の「呉公作鎮澤郷碑」 碑文

呉錦堂公作鎮乃余岳父揚壽彭摯友呉公幼事農耕後學商賈終成大業余少年即服膺其創業精神及成年得繼宏願服務於神戸華僑社會耳濡目染遂更識其業績之光輝於華僑界開創工商教育公益事業有筆路藍縷之豐功於祖籍慈溪又興辦教育水利賑濟事業有砥柱中天之偉業懿行碩德萬衆傳揚一九八六年秋余以古希乃年造訪慈溪得償拜謁靈寢之宿願并親睹公造福桑梓之余緒巍巍學宮弦歌不斷浩浩杜白澤被鄉里公當年為之費近十年心力耗念七萬銀元慈溪父老至今猶有口皆碑余謂如公者豐功利於國普惠濟及民雖客死異邦亦可含笑九泉矣今值公逝世六十四周年感佩之餘建亭立澤郷碑并為之記以追祭先賢而永照後世時公元一九九一年五月二十日留日神戸華僑陳徳仁謹記

慈溪陳鴈書丹



左の「呉公作鎮澤郷碑」は、この頁、左上の「澤郷亭」の拡大写真。なお、「澤郷亭」は呉錦堂墓の傍らに立つ。



呉錦堂先生、本名は作鎮。先生は私の岳父楊壽彭の親友である。呉先生は幼くして農耕に従事し、のち、商売を学び終に大業をなした。私は少年時、その創業精神を心にとどめ、成年になると、神戸の華僑社会に奉仕するという偉大な志を受け継いだ。目にし耳にしているうちに、更に、その業績の光輝を識ることとなった。即ち、先生は華僑界に於いて、工商教育や公益事業を創始し、(※一)筆路藍縷の苦勞をして多くの業績を残した。また、原籍慈溪では、学校を設立し、水利事業や救済事業を行い、(※二)砥柱中天的の偉業をなし、その立派な言行とすぐれた人柄は万衆に知れ渡っている。私は一九八六年、古希の年の秋、慈溪を訪問し、靈寢を拜謁するという宿願を果たすことができた。併せて、先生が郷里に幸福をもたらした事業、立派な学校、礼樂が絶えず浩浩として、郷里が恵みを受けている杜湖、白洋湖を直に見ることができた。先生は、これらの事業に当時、十年近い心力と二十七万銀元を費やした。慈溪の父老は今に至るまで、だれもがみな、先生を褒め称えている。先生は国に利益をもたらし、普く恵沢救済を民に及ぼした。先生は異国で亡くなられたが、あの世で微笑んでおられるだろう。今年は、先生が亡くなられて六十四周年に当る。感佩のあまり、亭を建て、澤郷碑を立て、先賢を追祭して後世を永照する。西曆一九九一年五月二十日在日神戸華僑陳徳仁謹んで記す 慈溪(※三) 陳鴈書丹

(※一)筆路藍縷(筆路藍縷) … 新規事業を始める困難さの形容。
 (※二)砥柱…黄河の激流の中にそびえ立つ砥柱(山の名)のように大局を支え毅然として動かないたとえ。
 (※三)陳鴈書丹…陳鴈は慈溪の人。一九九二年『陳雁书法洗集』を出版。書丹は朱筆で石に碑文を書くこと。広く、碑に文字を書くこと。石工がこれを刻んで石碑にする。

2 頁の旧墓表の日本語訳の続き

先生の経歴は、その自述で詳らかで、言葉遣いは真実で、虚飾がない、また、かつて、郷里の人に、遊び好きの怠け者になるな、過分な幸せを求めな、…は勤儉治生に帰すると言っているが、まちがいなく、先生を知っている人は誰もが言う、先生は本当に天才で、万貨を照らす才能があり、財を成したのにはそれだけのわけがあると。呉氏は(※5)仲雍の子孫の出です、仲雍は秦伯と一緒に荊へ行つた、後世の人は…

- * 1 清代、1851年、宗教結社上帝会の洪秀全が建てた太平天国の軍。
- * 2 義和団の北京入城に対し、日米英ほか8カ国は連合軍を組織してこれを鎮定した。この事件に際し、光緒帝は西安へ蒙塵。
- * 3 啓藩の誤りか？
- * 4 越の大夫、范蠡の異称。官を退いて陶の地に住み、巨万の富を得た。
- * 5 殷の人。周の太王の次子。兄太伯とともに荊蠻に適き、荊蠻は太伯を立てて呉君としたが、太伯卒して子なく、仲雍はこれを嗣いで立った。

大人物小故事 (2)

我的外公呉錦堂 曹愛徳著

当通信9号に続き、この10号では、第1話「感恩」を載せました。お楽しみください。この頁は2014年4月17日に追加いたしました。(編集委員 橋雄三)

感 恩

外公小时候既机灵又调皮，多少年前有一个夏天，艳阳高照，把大地烤得滚烫滚烫，老人们都躲在家里使劲地摇着蒲扇，驱赶热浪。而外公和孩子们依然在门口玩耍，玩累了就靠着一棵树打起盹来，可是树上的知了叫个不停，外公觉得有点无奈，忍不住就爬到树上去捉知了，可是一只只小知了很调皮，它们飞得高高的，躲在小树枝的尖端。那时候外公还不到十岁，根本不懂得什么是安全，还是一股劲地往上爬，但他力小，当他抓住那根树枝，一不小心树枝断了，外公就摔了下来，腰部正好砸在破的茅缸上，啊！鲜血直流。“哇”的一声哭喊，外公的母亲直奔门外喊救命，喊声哭声惊动了隔壁一位久病卧床的老奶奶，她不顾一切地从床上爬了起来，立刻叫媳妇去烧水，把一只鸡杀了取下了鸡皮迅速地贴在外公的腰部，这才止住了血，还把这只鸡给外公补身体。当时外公的妈妈激动得泪流满面，拉住了奶奶的手千多万谢，拼说：“这个恩情我们一定要报！”

我妈妈说：“真是穷人帮穷人！”他们家仅有一只鸡，是准备媳妇坐月子补身体的。慢慢的，我外公身体好了。时间过得真快，转眼外公离开了农村，来到上海当学徒tu，此后又漂洋到日本经商，拼搏成功发了大财，外公心理没有忘记邻居家救自己的大恩大德，外公说：“滴水之恩，当涌泉相报。”于是他经常悄悄地捐银子给他家，后来从日本回了老家又给他们盖楼房，买家具。妈妈还告诉我，外公还给邻居家的孙子娶了媳妇，花了不少银子。因此村里的人都称我外公是一个知恩图报的好人。

如今我已经做了奶奶了，外公的高尚品德时常地浮在我的脑海中，我也要像妈妈一样的教育自己的孩子懂得感恩。

感 恩

祖父は小さい時、すでに、利口で腕白でした。ずっと前、ある夏の日、太陽が高く照らし、大地は焼けるようで、年寄り暑さを避け、家の中で、暑気を追い払おうと、盛んに、シュロの葉で作った団扇をパタパタさせていました。でも、祖父たち子供らは、暑さも気にせず戸口で遊び、遊び疲れて、木にもたれてウトウトしていましたが、木の上の蝉は鳴きやまず、うるさくてたまらなく、木に登りセミを捕まえようとしていました。しかし、小さな蝉はみんな手におえず、高く飛び去り、小枝の先に隠れてしまいました。その時、祖父は、まだ十歳にもならず、根っから、何が安全かがわからず、息もつかず一気に木に登りました。しかし、力が小さく、その枝をつかんだとき、不注意にも枝が折れ、祖父は木から落下、腰を、ちょうど、割れた大きな甕にぶっつけました。あつ！鮮血がどっと流れました。“わあ”と一声、泣き叫び、祖父の母親は、大声で助けを求めて門の外へ駆け出しました。わめき声、泣き声は隣家の、ずっと病気で寝ているお婆さんを驚かせました。お婆さんは、一切かまわずベッドから起き上がり、直ちに、嫁に、湯を沸かしに行かせ、一羽の鶏を殺し皮をはぎ取り、すばやく、祖父の腰に貼り付けました。これで、やっと血が止まりました。また、この鶏を食べさせ栄養を付けさせました。その時、祖父の母親は感動し、顔中、涙で濡らし、お婆さんの手を取り何度も何度も感謝を述べ、“この御恩にきっと報います”と言いました。

私の母は、“これこそ本当に、貧乏人が貧乏人を助けたのです”と言いました。隣家には、ただ一羽の鶏がいただけで、その鶏は、産後の嫁に食べさせ、栄養をつけさせようとしていたものでした。ゆっくりと、祖父の体は回復しました。時間の経つのは早いもので、あつという間に祖父は村を離れ、上海へ行って商店の見習いになり、この後、はるばる海を渡り、日本へ行って、商業を営み、苦闘の末、成功して大金持ちになりました。しかし、祖父は、隣家が自分を救ってくれたという大恩徳を忘れず、“一滴の水の恩を涌き出る泉をもって報いる”と言いました。それで、祖父は、いつも、隣家にそっとお金を届け、その後、日本から故郷に帰ると、彼らのために家を建て、家具を買いました。母はまた、私に、お祖父さんは、また、隣家の孫に嫁を取り、相当なお金を使ったと言っていました。それで、村の人はみんな、私の祖父を、恩に感じそれに報いようとする立派な人、と言います。

今、私はすでにお婆さんになりましたが、祖父の気高く仁徳ある人柄が、いつも脳裏に浮かんできます。そして私も、母が私にしたように、私の子供を、恩を感じる人に育てたいと思います。